

原 清理事長、急逝さる

今 田 稔

原 清理事長が急逝された。朝日放送の会長として、朝日放送パリ支局の移転、スタジオ設置披露パーティーに出席のため、十月十七日、ニューヨークからパリに到着。十八日朝、同行者がホテルの部屋を訪ねて、氏が倒れておられるのを発見したとのことである。十八日午前零時（日本時間同八時）過ぎで、急性心不全と報道された。心から哀悼の意をお捧げする。

氏は一九〇七年四月十五日神戸市生まれ、八三年の御生涯だった。三〇年に関西学院高等商業学部を卒業し株式会社朝日新聞社に入社。大阪本社社会部長、西部本社編集局次長を経て、五一年、設立直後の朝日放送（本社・大阪市）に出向。放送部長に就任し、ラジオ開局に携わった同年に取締役。五九年、朝日放送（ラジオ）と大阪テレビ放送の合併により朝日放送常務となり、同社長を経て、八三年に同会長となられた。

海外放送界との交流を積極的に推進した「国際派」で、フランス国家功労オフィシエ勲章（七六年）、全米民間放送協会などから功労賞（八三年）、ニース名誉市民賞（八五年）、仏政府「フランス芸術文芸コマンドゥール勲章」（八八年）などを受けられた。八二年には大阪市北区に、音響では世界的な評価のあるクラシック音楽専用の「ザ・シンフォニ

「ホール」を建設し、サントリー音楽賞特別賞（八三年）、大阪文化賞（八四年）をそれぞれ受賞された。日本政府からは藍綬褒賞（七二年）、勲二等瑞宝章（七七年）を受章しておられる。

本当に幅の広い偉大な方であった。多方面にわたる要職をひきうけておられた。

六歳で父君を失われ、新聞配達や石鹼粉売りで家計を助け苦労を重ね、その後の人生航路を通じて、人情の機微には通じておられ、人の心の痛みなどは敏感に察知された。頑健なお体とおみうけした。小学校時代の一日がかりの遠泳で、和田岬の陸にあがろうとすると、体はなんともないのに足が立たなかった、と笑っておられた。ザ・プラザでの我々の会合の途中で、「今、ミス・ユニバースの表彰をして来ました。」と白いブレザーコートで颯爽と顔をお見せになったことがある。ダンディーだった。ベスト・ドレッサーに選ばれたこともおありになる。

また、ザ・シンフォニーホールにあのカラヤン氏を招聘することができたきっかけの話題は、お二人がそれぞれに楽しんでるスポーツカーの腕自慢だったとうかがっている。

潑刺とした毎日をすごしておられた。

神戸女学院では湯浅恭三名管理事から七三年に理事長をおひきうけいただいた。いつも温顔で、誠実におつとめ下さった。とりわけ八八年頃にはじまる神戸女学院の大きな変動期に、海外の、また国内での超過密なスケジュールの時間をさいて、学院のために惜しみなくお力を傾けていただいたのは感謝のほかない。十月二十三日の城崎 進院長就任式での御挨拶を心待ちにしておられたことと拝察する。

なにぶんにも海外での急変のため、御遺体が日本に帰られたのは十月二十六日であった。十月二十九日に日本聖公会神戸聖ミカエル大聖堂で、「ミカエル・原 清 葬送告別式」がおこなわれた。御長男の原 涼一氏は「一九九〇年十月十八日、秋の朝、パリに死す。父らしい最後でした。……マロニエの散りはじめた美しい街から天に召された

のは、青春のさ中の若い魂であった、と思えてなりません。」と述べておられる。強い共感をおぼえることをどうかお許しいただきたい。

奥様は五年前に同じパリで発病され、先だたれた。お二人が御一緒に、天上で平安におすごしになることを心からお祈りする次第である。

(理事長代行)